河北新報
河北新報社
仙台市青葉区五橋1-2-28
(郵便番号 980)
主な電話
(022) 211-下記番号
報道 部1127　広告外務部1318
スポーツ1130　広告内務部1312
学芸 部1132　事業 部1332
販売 部1304　総務 部1402
読者相談室1447
総合案内(022)211-1111
© 河北新報社 1991

欧州最大の文化団体「ECC」

誕生に立ち会って

——豊島重之

芸術家を襲った激動

目にみえる壁の消滅は、かえって無数の目にみえない壁を生みだす。現在、欧州全土を覆う歓迎すべき自由化・統合化の波は半面、個々の文化生活・芸術表現には散乱や退行を招きかねないものだ。そこに経済の逼迫(ひっぱく)、諸民族対立、衣替えしただけの種々の反動が拍車をかける。これらは自由化・統合化によって激化こそすれ、沈静することなしに一人の芸術家を襲う。こうした根深い危機感こそ、「ヨーロッパ・カルチュア・クラブ(略称ECC)設立総会」の原動力にほかならない。

昨年末、チェコのプラハで開かれた総会には、旧東欧を中心にソ連・北欧・旧西欧など欧・全ジャンル(美術・音楽・演劇・文学・映画・インターメディア)から二十二カ国、四百人をこえる参加があり、その二大テーマは「トータリズム下の20世紀文化」と「カフカを起点とした21世紀芸術」であった。総会初日、全出席者に配られた劇作家ヴァツラフ・ハヴェル大統領の祝辞メッセージが端的にそれを物語っている。

「今、だれかが私をヨゼフ・Kのように裁判所や石切場に連行したとしても、まどろむ独房で「起床!」という突然の声にとびおきたあの時ほど厳さはしないだろう。私はこの世界とのかかわりをカフカを通して体験するほかなかった。胸をしめつけてやまない存在感の根底的な異和、だからこそ到達不可能な物事の秩序への渇望、この背中合わせの逆説を私は一歩一歩突き進んでいるからだ(拙訳)」—ここには二十年ぶりのカフカ復活と軌を一にした欧州最大の文化団体ECC発足の意義と進むべき方途がある。

新しいカフカ像模索

いわゆるビロード革命の直前の夏と一年後の冬、私は貴重なプラハ再訪となった。ここ六年来、一貫してカフカの手紙の舞台化に挑み、八戸とプラハで「国際カフカ・フェスティバル」を連動開催して、二十年間禁書だったカフカ復活のきっかけを作ったことから、今回のECCシンポジウムのパネラーに招かれたわけである。

文学のみならず芸術で新しいカフカ像が模索され、英仏の対照的なカフカ劇がパネル上演される一方、彼の小説を大規模なカフカ・ミュージアムに改築する計画や、ドイツのポップフムでの国際カフカ展などが決定した。私は「遅さの発見・カフカと現代日本」と題して以下の提案をした。

「私はここからもカフカからも一番遠い所から来た。その高度情報化社会ではだれもが遅さを求め、近さを悩む。人々はどんどん孤立し、遅近感を喪失する。それが危機なら、危機への処方箋(せん)もそこにあるはずだ。それを告知したのはカフカその人であり、そこにこそカフカは転生する。遅近感を喪失した彼に初めて到来する新しい遅さ、解釈の絶望ではなく実験の希望として」—無論ここと は、米ソ冷戦時代の西欧の周縁部であった東欧ではなく、アジアを含むソ連とアフリカを含む西欧を両翼とした新生ヨーロッパの中心部たる東欧をさしている。まさにECC設立は九一年の幕あけ、九〇年代の始動にふさわしい、世界の文化地図を塗り変えるほどの出来事なのだ。

ECCシンポジウムで提言する筆者(左から三人目)。左から三人目がソ連の演出家ヴィルキン教授、その隣が座長のカウトマン教授

紀要確信した会見

それだけにだれもがトータリズム復興の兆しに神経質なのも否めない。総会最終日、「これだけ大きな団体では未来への細密な創造力は望めないのではないか」と、チェコの若手女性作家テレサ・ブーチコヴァが颯爽(さっそう)と異論を張ったのもその証左だ。総会後、それが杞憂(きゆう)であるという確信を私は次の三人との会見から得ることができた。

初代会長に選出されたチェコの劇作家ヨゼフ・チサロフスキ博士は「われわれの内なる敵はヨーロッパ中心主義であり、特にアジアのあなた方との芸術交流によってそれを打破していきたい。ぜひ、日本のECC窓口になって下さい」と力説し、ポーランド現代美術センターのヴォイチェフ・クルコウスキ館長は「今はまだビッグ・バン直後の無数の礫々がぶつかり合っているだけだ。これから壮大なハーモニーを創(つく)るためにあなた方の助力が不可欠でしょう」と語ってくれた。ハヴェルを戦慄(りつ)させた旧トータリズムの「起床!」が、他方、それを打倒すべく新しい秩序へと彼を「覚醒(せい)!」させた声でもあったことを何度でも想起しよう。

旧東欧三カ国・三週間の旅から帰った私は、日本とりわけ東北の文化芸術活動が一段と重要さを増しているのを痛感する。来る三月三日、[illegible]市民シアターの大川智昌氏を招いて行われる[illegible]のシンポジウムでもこの動きを紹介するつもりだが、世界のアートが切実な分水嶺(れい)にさしかかっている時、もはや本当の危機感を原動力としないどんな舞台芸術も無意味ではあるまいか。

(モレキュラー・シアター演出家・舞踏批評・八戸市在住)